國學院大學学術情報リポジトリ

談話室 時代は情報化社会?

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 公開日: 2023-02-05 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 林, 利久, Hayashi, Toshihisa メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.57529/00000082

時代は情報化社会？

林　利久

昭和四十六年の雑誌『言語生活』２３５号（筑摩書房、1971.4.1刊）「特集：辞典・事典」（p. 2〜13）の中で、「辞書を引いてもわからない」と言う座談会が開かれている。

少し長くなるが、その中で「辞書をひくたのしみがなくなるか」とし、草柳大蔵氏が語る部分を読んでいただきたい。

「これからは、テレフォンサービスになるんじゃないですか、ほとんど。インフォーメーション・サービスといいますかね。」「スタジオにいろいろな人がいて、答えてくれるわけですね。…略…　知識の共有時代みたいなものが始まるんじゃないですか。辞書とか、百科事典というのは、ある意味でいうと知識の私有でしょう。お金を払った人しか見られないわけですよね。それがもっと共有化されるんじゃないかと思います。そうなった場合、地球の円周率の計算なんか、電話一本でやれちゃうでしょう。勉強ということのプロセスがみなすっ飛んで、結果だけ拾っていく。頭脳のトレーニングというのは、やはりトライアル・エンド・エラーがあったり、ぶつかってくやしがって涙流したり、どうしても応用問題が解けなかったり、というところにあるのでしょう。もともと勉強というのはツバンクという意味だからね、自分に強制力があって、それでようやく知識が歩どまらないんじゃないかという感じがするんです。あまり簡単に手に入っちゃうから。魚で胎生類は何ですかと一発聞くと、パッパッと出てくるでしょう。いまのわれわれだったら、一生けんめい引かないとわからない。その引いている間の楽しみというのが、あるんですよ。トレースしている間の。その楽しみがなくなっちゃうんじゃないか。知識は共有されるけれども、知恵がつかないんじゃないか。知識と知恵は違うと思うんだ。それが心配なんですよ。やはり戦中派のがんこさからくるものでしょうかね。」

また、同じ雑誌の「言語社会時評」（p. 14〜15）には、「いい加減な情報管理」として、コンピュータ用磁気テープの情報が、複製により中身の情報が同業者に流れて利用されていたことについての記事が載る。そして最後に「情報を利用することに急なあまり、安易な方法に流れ、個人が見失われているような気がする。」と結ばれている。ちなみ

に、この一文の中には「国民一人一人に番号を付けて行政事務を能率化するとかの、国民背番号化」の言葉も見られる。

これらは、四十年以上も前の話で、現在の世とは隔世の感がするのだが、本当に隔世と言えるのであろうか？

自分で辞書を引かず、他者に調べてもらい解答だけを得るだけに変わることを予見しているし、もう一方では、情報というものが法的に保護されていないことを憂いているとともに、「個人が見失われているような気がする」としているのだが。

私は、図書館情報学の「情報サービス論」「情報サービス演習Ⅰ」を担当しており、必修の課題として幾つかのレポートを課している。その一つは、ネット情報で様々な情報を得ることが出来るのだが、実際に原典・出典に当たって確認をしているのかどうかを問うもの。もう一つは、ネット情報では調べられず、自分自身で記述のある資料を探し、調査しなければならないものを問題にしてある。（課題を出す前には、言葉を調べるための古い辞典・事典について解説を加えているのはもちろんである。）

しかし、近年のレポートの回答には「ネットで調べたが出てこなかった。」との記述が多くなっていることを危惧しているのだ。ネット検索をすれば、とりあえず記述が出てくる。それを「正しい」と判断し、ただ闇雲に信じてしまっているように思える。そして、出て来なければ、もはや調べることが出来ないようだ。

近年の出版物で、大学院を修了した者が、自らの研究成果を纏め図書として発表しているものがある。その巻末に数多くの文献目録が付されているのだが、何か違和感を感ずるので調べてみると、その中に掲載されているものが、ネットで検索されたものばかりであり、基本的な先行文献の数多くが落ちているのだった。

落とされた先行文献には、論題に該当の言葉・語彙が含まれていないもの。図書では、内容を読んで見ないと、その分野の事に言及しているとは気が付かないもの等など。ネット検索では拾いきれない文献であった。もはや、ネットに出てこなければ「存在しない」と判断されたようだ。これが研究の最前線として語られるようでは、何と言ってよいか分からなくなる。少なくとも尋常ではない。

ある日、面白いネットのブログを見つけた。学生時代の課題で言葉を調べる苦労を語りながら、最後に「楽しかったー」と記載している。私の授業を受けていた学生（数年前の卒業生）が作成していると思われる。苦しんで調べることで、学ぶこと・調べることの楽しさを感じてもらえたようだ。しかし、このブログを見つけたのは情報化社会の結果でもあるのだが……。

（図書館情報学）